

第44回

Sister City Communication Club

シスター・シティー・コミュニケーション・クラブ

この SCCC は姉妹都市をはじめ、海外からスピーカーをお招きし、英語によるご講演をお聞きするとともに、講演後は参加者がスピーカーを囲んで英語で懇談いただき、交流を深めながらコミュニケーション力を高める機会とするものです。

さて、今回はゲスト・スピーカーに、オーストラリア メルボルンのモナシュ大学准教授で、現在研究のため国際日本文化研究センター客員外国人研究員として来日中のアリソン・トキタさんをお迎えして、午後のひとときを皆様とともに過ごしたく、下記のとおり企画致しました。

ご友人もお誘いの上、ぜひご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

なお、当日はケーキとお飲み物のご用意をして、皆様のご参加をお待ちしております。

日時 : 平成 21 年 2 月 14 日 (土) 14:30~16:30

場所 : 大阪国際交流センター地下 1 階 フロンティアクラブ
(大阪市天王寺区上本町 8 丁目 2 番 6 号)

スピーカー : Alison Tokita
(Visiting Research Scholars, International Research Center for Japanese Studies)

タイトル : “ Melbourne, Osaka and Music ”
(講演はすべて英語で行います。今回の講演の内容の要約については、別紙をご参照ください。また、講演後の参加者相互の懇談会も英語が中心になります。)

参加費 : 一般 1,000 円 (当日会場受付にてお支払いください)
(※注) 姉妹都市協会会員およびSCCC会員は 500 円にてご参加いただけます。

定員 : 50 名(うち、会員およびご同伴者 40 名、一般 10 名)
(※注) 会場の都合で先着とさせていただきます。

お申込み : 2 月 6 日(金)までに E-mail 又は FAX にて、郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記の上、下記までお申し込みください。
(なお、いただいた個人情報は本事業目的以外には使用いたしません。)

《お申込み・お問合せ》

(財)大阪国際交流センター 情報企画部 姉妹都市協会担当

TEL:06 6772 9670 FAX:06 6772 9790

E-Mail: info@sisterc.net

URL: <http://www.sisterc.net/>

(別紙)

Profile:



Dr. Alison TOKITA (アリソン トキタ)

1989年3月 Ph.D. (モナシュ大学)

2003年1月 モナシュ大学 准教授

2008年4月 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター 客員外国人研究員就任
(2009年3月まで)

■専門分野 日本舞台芸術 (音楽)

■現在の研究テーマ: 両世界大戦間 (1918-1938年) の大阪における音楽と近代

<http://www.nichibun.ac.jp/research/faculty/staff3/tokita.html>

<http://www.arts.monash.edu.au/japanese/staff/atokita.php>

スピーカーのアリソン・トキタさんから当日の講演の要約をいただきましたので、皆様にお知らせします。

この度の講演内容は、アリソン・トキタさんの研究テーマに関することが中心となりますので、是非下記の要約をお読みいただき、当日の聴講やご質問にお役立てください。

Title :

“Melbourne, Osaka and Music” メルボルン、大阪、それから音楽

Summary :

My first thirty years of interaction with Japan focussed on research of traditional Japanese music, with my eyes closed about the reality of Western music in Japan. I have always enjoyed coming to Osaka to see Bunraku and Naniwa-bushi performances. My new project is piano as a symbol of modernity in pre-war Osaka.

This has led to carrying out a number of interviews with people about their engagement with piano and the position of piano in the prewar period. I have been surprised at finding so many similarities with experiences in Melbourne in same period. This shows another aspect of contemporaneity 同時代性 of Japan's modernity with that in Western countries.

Now I am passionately interested in hearing people's life stories of interaction with music in Japan, and indeed in East Asia. For this purpose, I am making a short trip to Seoul, Beijing, Harbin and Shanghai at the end of February to gather comparative data which will provide a further comparative context for Osaka's modern music culture.